

2013年3月期 第1四半期 決算カンファレンスコールでの主な質疑応答内容

(2012年8月1日実施)

【第2四半期以降の見通し】

Q：第1四半期から第2四半期にかけての各セグメントの売上と利益の動向を教えてください。

A：部品事業では、各セグメントにおいて売上、利益ともに上がっていく。セグメント間でばらつきはあるが、第1四半期に比べ+10～20%位は伸びてくる。

機器事業では、通信機器関連事業は第1四半期に棚卸資産の評価損があったが、それを除くと第1四半期も黒字であり、第2四半期の利益はさらに改善する見通し。情報機器関連事業は為替の影響も考慮すると第1四半期に比べ若干落ちる見通し。

全体的には、部品事業が第2四半期の業績向上を牽引する見込みである。

Q：今回、AVX Corporationの環境汚染浄化費用の影響額以外は通期の業績予想を変えていないので、為替レートの変更の影響分は実質的には上方修正となると思うが、上振れの要因を教えてください。

A：7月以降の為替レートの変更による影響額は、売上高は約▲200億円、利益は約▲100億円となる見通し。

環境汚染浄化費用の計上は想定外だったので今期の通期業績予想に反映させたが、それ以外の第1四半期の業績はおおよそ想定内であり、また、第2四半期も概ね計画通りとなる見通しであるため、現時点で環境汚染浄化費用の影響以外は、業績予想の見直しは行っていない。

下期は、円高や欧州での財政問題、中国経済の減速感等が懸念される一方で、国内メガソーラー案件による業績拡大が期待できる状況にある。

8月、9月に下期の計画を策定するが、その時点で事業状況を精査し、見極めたいと考えている。

現時点で確実な上振れ要因があるというわけではなく、状況に大きな変化があるわけではない。

Q：第2四半期の利益の見通しを教えてください。

A：四半期毎の業績予想を開示していないが、下期から利益は大きく増加する見通しを期初に立てている。

通常、第2四半期から第3四半期は季節性で需要が上がってくるため、部品事業を中心に下期に向かって利益は上がってくると予想している。

Q：京セラは四半期で300～350億円程度の営業利益を出せる実力がある企業であると考えているが、第2四半期はこの水準にまで営業利益を上げられるか。

A：利益は月ごとに上がってきており、現時点では想定通りに進んでいる。売上の伸びに見合った利益の増加を見込んでいる。

【部品事業】

Q：部品事業のうち、ファインセラミック部品関連事業、半導体部品関連事業、電子デバイス関連事業の第1四半期から第2四半期への業績の伸びのイメージと、期初計画との違いを教えてください。

A：ファインセラミック部品関連事業の第1四半期の売上高は、ほぼ計画通りか若干上振れた。第2四半期は第1四半期比で最低でも横ばいを予想しており、10%増を目指す。半導体部品関連事業の第1四半期の売上高は計画より上振れた。第2四半期は20%増を目指したい。電子デバイス関連事業の第1四半期の売上高は期初の計画通りであり、第2四半期は10%増を目指す。

Q：他社は第2四半期の需要の伸びが鈍いようだが、他社と京セラの違いは何か。

A：特定顧客に偏っていないことが理由の一つと考えられる。

Q：CMOSイメージセンサー用セラミックパッケージは顧客の影響を受けていないか。

A：当社は市場シェアが高く、幅広い顧客へ納めている。

Q：環境汚染浄化費用を除いた電子デバイス関連事業の利益は前期第4四半期比で改善していると思うが、その要因は何か。

A：コンデンサ、コネクタ、水晶を含めて全体的に利益は改善している。前期第4四半期が部品需要の底で、セットメーカーの在庫調整は終わっており、第1四半期から需要が伸びている。第2四半期も需要は伸びると見ている。

【ソーラーエネルギー事業】

Q：ソーラーエネルギー事業の第1四半期の売上高は、前年同期比、前期第4四半期比で、それぞれどれくらい下がったのか。また、赤字だったのか。

A：ソーラーエネルギー事業の第1四半期の売上高は、前年同期比で20～30%の減少、前期第4四半期比で10～20%程度の減少となった。

ソーラーエネルギー事業での価格の下落等で前期の第2四半期以降、利益面では厳しい状況が続いている。

日本での再生可能エネルギーの固定価格買取制度の買取価格の最終決定が遅れ、様子見の状態が続き、需要が落ちた。

Q：ソーラーエネルギー事業の第1四半期の国内外の売上高比率、産業用と民生用との売上高比率をそれぞれ教えてほしい。また、ソーラーエネルギー事業の第2四半期以降の見通しはどうか

A：第1四半期の国内外の売上高比率は半々程度。産業用と民生用では民生用が圧倒的に多かった。

日本での再生可能エネルギーの固定価格買取制度は7月からスタートしたが、当初の予定よりも買取条件の最終決定が遅れた。そのため、第1四半期では国内のメガソーラーの売上貢献はまだ少ない。

第2四半期以降に立ち上がり、第3、第4四半期にかけて増えていくイメージを持っている。このため、今後、国内外の売上高比率は、国内6割、海外4割程度になると見ている。

Q：一般的に収益性は民生用が高く、メガソーラーなどの産業用は厳しいと思うが、今後メガソーラー向けの売上が伸びていく中でソーラーエネルギー事業の収益性は落ちていくのか。

A：そうではない。

メガソーラー案件は確かに競争が厳しいが、採算の出る案件を手がけていく。

さらにボリュームが増えるので、増収効果により収益性は上がると考えている。

民生用の価格も厳しくなってきたはいるが、期末に向かってソーラーエネルギー事業の収益性が下がることはない。

生産量が増えれば収益性は上がっていく。

Q：ソーラーエネルギー事業の6月、7月の状況を踏まえた第2四半期の受注、売上の見通しはどうか。

A：ソーラーエネルギー事業の6月、7月の状況は、受注が売上に先行した状態だった。

日本での再生可能エネルギーの全量買取制度の開始により、7月から国内メガソーラー案件の注文が本格化した。しかし、その全てが第2四半期に売上計上されるわけではない。

来年3月までの足の長い案件が多いため、利益貢献は第3、第4四半期にも出てくる。

もちろん、第2四半期への貢献も十分あり、ソーラーエネルギー事業の第2四半期の業績は確実に改善する。

Q：ソーラーエネルギー事業の第2四半期の売上高は第1四半期に比べどれくらい伸ばせると考えているか。

A：30～40%程度伸びると考えている。

Q：ソーラーセル・モジュールの出荷を上回る需要に対して、どのように対応していくのか。生産能力を増強するのか。

A：国内産業用の受注は7月から本格的しており、第1四半期の売上への貢献は大きくなかった。しかし、第1四半期に見込み生産を行っており、在庫を増やしている。

来期の買取価格の動向が不透明であり、受注の急速な低下も考えられるため、現在では生産能力の増強は考えていない。既存の設備をフル稼働させて今期は対応していく。

Q：ソーラーエネルギー事業については、売上高は想定通りだが、利益が伸びるイメージか。

A：収益性が良くなるイメージ。

競争により価格は厳しくなっているので、採算性を重視していく。

【AVX Corporationでの環境汚染浄化費用】

Q：今後、環境汚染浄化費用の見積額が増えることはないのか。

A：366百万米ドルはあくまでもAVX Corporationの見積もりであり、まだ何も確定していない。見積額が増えるかどうかについては現時点でコメントできることはない。

Q：366百万米ドルは、現時点で考えられる最低限の費用ということか。

A：AVX Corporationが現時点で当該費用を366百万米ドルへ引き上げるのが適当と判断したということ。

以上